昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要　Vol. 26　(19)～(41)（2017）

〈資料〉

有珠善光寺関係資料

Materials relating to Usu Zenkou Ji Temple

関口　静雄　宮本　花恵

Shizuo SEKIGUCHI, Hanae MIYAMOTO

北海道伊達市有珠町所在の大臼山道場院善光寺の関係資料を紹介する。

文化元年（一八〇四）、江戸幕府は蝦夷地奉行の願い出により、いわゆる蝦夷三官寺の設置を決定した。幕府は蝦夷地支配にあたり、様似に天台宗帰嚮山厚沢寺等澍院・有珠に浄土宗大臼山善光寺・厚岸に臨済宗景雲山国泰寺の三寺を建立し、露国の南下に対する警戒警備とアイヌの親露化防止を画策した。蝦夷地警備を弘前・盛岡の二藩に命じ、非常時出兵は秋田・庄内・仙台・会津諸藩に命じたことや、交易を目的に蝦夷地に渡る商人等々の和人も増大したから、三寺の教化布教もアイヌだけを対象としたものではなかった。

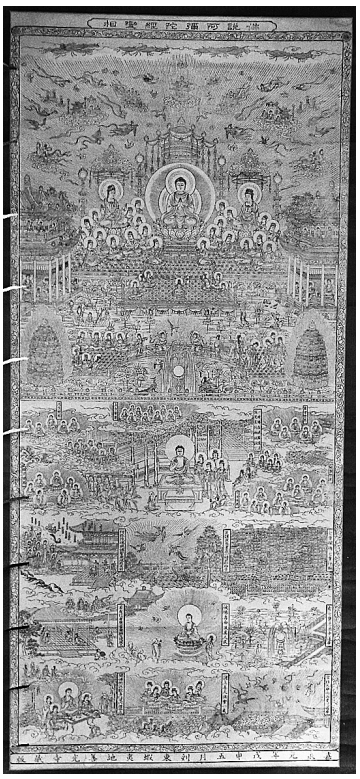
有珠善光寺は木食円空・木喰五行、また菅江真澄・松浦武四郎が訪れたことでも知られるが、寺格は等澍院に次ぎ、国泰寺の上位に位置していたと伝え、噴火湾岸のヤマコシナイ（八雲町山越）からシラオイ（白老町）までをその教化の持場にしたという。文政五年（一八二二）と嘉永六年（一八五三）の有珠山噴火によって多くの寺宝を失ったが、それでもなお貴重な資料が伝蔵されている。中でも四世弁定が開版した『念仏上人子引歌』は和文にアイヌ語文を併記したもので、その板木はアイヌ語を刻したものとして道内における現存最古のものとされる。善光寺歴代は教化の方便として木版の刷り物を印施したようで、ために多種の板木が伝えられている。また『善光寺過去帳』はアイヌの人たちの名が記されており、百万遍念珠も伝わることから宗風の浸透ぶりを窺うことができる。そのほか釈迦如来大仏（道指定文化財）・円空鉈作りの観音菩薩像（同）・黄檗版一切経など貴重な遺品が存する。善光寺は昭和四十九年に宝物館を開館し、資料の整理と研究に努力している。その驥尾に付して、このたびは「有珠善光寺関係資料」として、下記五点の資料について愚稿を記しおきたい。

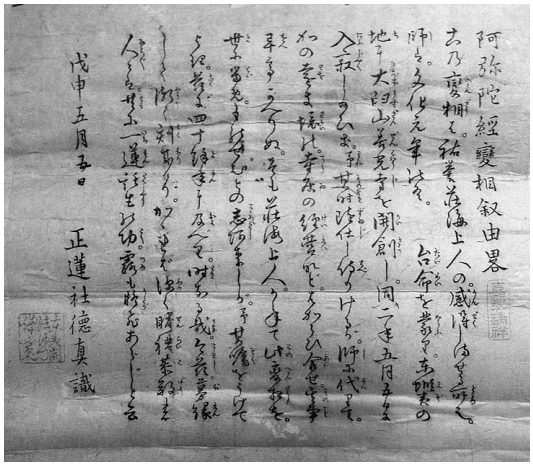
1. 『佛説阿彌陀經變相』嘉永元年（一八四八）正蓮社徳信識、善光寺蔵版。
2. 『鸞洲和尚畫像』洛東臨照院蔵・椿椿山筆『鸞洲和尚畫像』の木版印刷。
3. 『後世の枝折』鸞洲撰明治二十七年（一八九四）小石川宗慶寺蔵版。
4. 『蝦夷地大臼山善光寺縁起』文化三年（一八〇六）善光寺幹事誌。
5. 『念佛上人子引歌』弁瑞撰善光寺蔵版。

（関口）

［追記］善光寺木立真理師から『蝦夷地善光寺日鑑』等々貴重な資料と大切なお教えを戴いた。感謝申し上げる。

［資料1］『佛説阿彌陀經變相』嘉永元年正蓮社德真識　東蝦夷地善光寺蔵版





阿弥陀經變相叙由畧　〔嘉永瑞祥〕（朱印）

この變相は。祐誉荘海上人の。感得しませる所也。／師は。文化元年の冬。　台命を蒙り。東蝦夷の／地に。大臼山善光寺を開創し。同ニ二年五月五日に／入寂し給ひき。予其時随仕し侍りけるが。師に代りて。／かの遠き境の。寺居の経營など。はからひ合せ。其事／畢てかへりぬ。そも荘海上人。かねて此変相を。／世に留め。ものせむとの志ありしが。予其嘱をうけて／より。茲に四十餘年に及べり。時なる哉。今茲。募縁／して漸く刻來けり。かゝれば深く瞻禮恭敬の／人〻は。共に一蓮託生の功。露も疑ひあらじと云

戊申五月五日　　正蓮社德真識

〔東夷開／法沙門／誠寛〕（朱印）

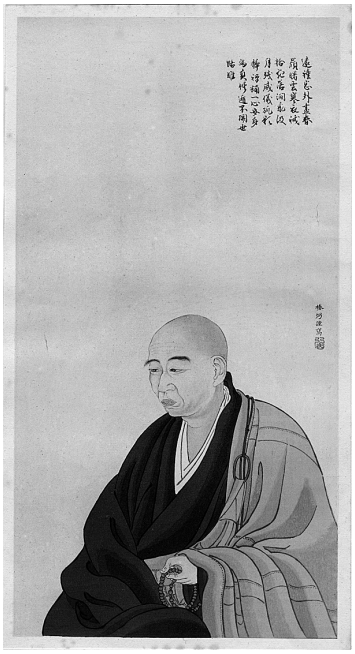
版行由来によって、これが嘉永元年（一八四八）五月、六世順立の代に有珠善光寺から版行されたものと知れる。募縁して開版するなどの労をとった正蓮社德真は善光寺開山荘海に随仕したというが、『善光寺日鑑』等々の史料にその名が見出せない。荘海に随従したのは成寛・観応・忍彫・密成・了性・百順の七僧で、他に「童子壱人」があった。その童子であろうか。しかし童子が急逝した住職荘海に代わって「寺居の経營」をしたとは思われない。なお末尾の角印に「東夷開法沙門誠寛」とある。この誠寛が『善光寺日鑑』に荘海の随従僧の筆頭に記された成寛であるとすると、二世鸞洲が着任するまでのあいだ「寺居の経營」をしたことは十分に考えられる。さらに精査したい。ともあれ変相は荘海の感得したもので、荘海はこれを刻して印施し、教化の用とすることを企図していたのである。没後四十余年、付嘱された德真は師の志を果たしたのである。なお荘海が江戸を発つ前に観経曼陀羅・釈迦涅槃図等が用意されており、また歴代が収集した変相図類が善光寺宝物館に所蔵されているが、ここに紹介する『佛説阿彌陀經變相』は存しないようである。

（関口）

右の浄土変相図一幅（木版。全体一六三×六六㎝、本紙一三三×五八㎝。宮島コレクション蔵）は上部に『佛説阿彌陀經變相』、下部に「嘉永元年戊申五月刻東蝦夷地善光寺藏版」とあり、裏面に木版摺の版行由来が貼付されている。

［資料2］

鸞洲和尚畫像



右の『鸞洲和尚畫像』は古美術研究誌「國華」九一七号（昭和二十七年二月、國華社）に紹介されたもので、洛東臨照院所蔵の椿椿山筆『鸞洲和尚像』を秋山兼吉が彫刻し、猪腰美一が色摺した木版画である。画面上部に有栖川宮七代韶仁親王筆の鸞洲作詩「遠鐘窓外盡春／嶺曙雲寒衣裓／拾花落澗衆汲／月殘威儀孤影／靜誦一心安身／爲貞修遁不関世／路難」の着賛がある。鸞洲は天保十四年（一八四三）四月十九日に没し、親王も弘化二年（一八四五）二月十六日に薨去されているから、おそらく天保末頃の作と思われる。

鸞洲は有珠善光寺二世を退任後は知恩院末常紫衣寺院の江戸浅草田島山誓願寺住職となったが、台命によって知恩院宮尊超入道親王華頂王府の侍読となった。林照順編『照臨院誌』（昭和八年十一月、照臨院）によれば、文政元年（一八一七）十月六日、尊超入道親王の兄有栖川宮七代韶仁親王妃妙勝定院の父閑院宮美仁親王が薨去されると、側室で妙勝定院の生母堀川依子（通称千代、のち少将）は落飾し信行院（はじめ慈生院、のち信楽院、さらに信行院）と号して故美仁親王の菩提を弔い、造寺を立願してこれを鸞洲に委嘱された。鸞洲は浄土律の祖ともいうべき霊潭性澂（一六六一―一七三四）が剏した洛東聖臨菴が荒廃しているのを知って、これを再興し信行院の所願成就を図った。しかし信行院は文政十三年（一八三〇）四月九日に急逝せられて、聖臨菴再興事業は頓挫してしまった。妙勝定院宮の悲嘆はふかく、生母生前の所願成就をつよく願われたので鸞洲も堂宇造営に邁進し、ほどなく竣工したという。鸞洲は信行院を第九世中興一世となし、聖臨菴を改めて照臨院と号した。次いで妙勝定院宮は西七条の真言律宗水薬師寺止住の公家小倉中納言豊季の女子をして浄土宗に転宗せしめ、天保九年（一八三八）これを鸞洲に剃髪せしめて当院十世とせられた。常照大法尼である。以来照臨院は律苑尼寺として今日に至っている。その後また鸞洲は台命によって浅草誓願寺に帰り、そこで没した。戒名は至誠心院翔蓮社鳳誉上人仰阿。戒名中の院号は尊超入道親王の下賜せられたものである。墓所は誓願寺（現府中市紅葉丘）に在る。

鸞洲がその再興に尽力した照臨院は、霊潭性澂が近江安養寺の戒山慧堅とその高弟湛堂慧淑から受戒したことや、妙勝定院宮が木食彈誓上人開山古知谷阿弥陀寺の顕阿祐月に帰依して照臨院を阿弥陀寺の伝法道場としたこと、また鸞洲が彈誓上人を思慕した木食徳本上人の門弟であったこともあって、浄土律に感心を寄せる僧たちが盛んに往来した。たとえば磐城の守一無能の弟子で無能寺奉律一世となった良照不能は聖臨菴において法潭・可圓・称察・普寂四師の証明のもとに進具し、のち江戸目黒長泉律院二世となっている。仏教学全般に通じ、華厳の鳳潭とならび称された普寂徳門（一七〇七―一七八一）もまた長泉律院三世を董している。『普寂徳門和上傳』によると普寂は元文元年（一七三六）頃の若き日、照臨院に寓して真如敬首の講義を聞いている。この敬首もまた近江安養寺の湛堂慧淑から受戒している。鸞洲の行実から生じた法脈はかくも広く重い。

なお、右に掲出した『鸞洲和尚畫像』は國華社がこれを単独に版行（刊年不明）したものである。宮島コレクション蔵の一本を採った。

（関口）

［資料3］鳳誉鸞洲撰『後世の枝折』

有珠善光寺第二世鳳誉鸞洲撰『後世の枝折』を翻刻紹介する。

『蝦夷地善光寺日鑑』等によれば、文化二年（一八〇五）三月九日、三官寺住職は霊岸島会所（東京都中央区）で仏像・仏具等を受け取り、各々吉日を選んで江戸を発った。有珠善光寺開山となるべき祐誉荘海も三月末に江戸を発ち蝦夷地に向かったが、しかし五月五日、有珠を目前にして箱館で急逝した。これを受けて江戸増上寺五十四世倫誉念海（一八〇三）の推挙によって急遽二世に抜擢されたのが鸞洲だった。当時三十五歳の鸞洲は江戸小石川無量山伝通院寿経寺の月行事で塔頭白蓮社の学寮主だった。

『後世の枝折』に付載された略伝等によると、鸞洲（一七七二―一八四三）は筑前国の人で、はじめ博多妙圓寺（博多区住吉）演誉の弟子となり、後に伝通院賢洲（一八一三）の門下となった。賢洲は浄土律の系譜を引く学僧で、増上寺四十五世成誉大玄が江戸目黒に創建した長泉律院の普寂に師事し、晩年は久留米善導寺の住職となった。この賢洲から京都遊学を命じられたが、しかし鸞洲は紀州の浄土系木食僧徳本（一七五八―一八一八）の道業を慕ってこれに従い山居した。その後また伝通院に戻って白蓮社に止住し、同院の月行事役をしていた。そうした時に有珠善光寺二世の台命を受けたのだった。

台命を拝した鸞洲は、文化三年（一八〇六）五月五日に荘海の一周忌法要を勤修した後、五月十四日に江戸を発った。蝦夷地赴任にあたって鸞洲は「大谷田善応寺ニ貞極師之本一蔵箱」を所望し、それを蝦夷地へ送るよう増上寺役者へ依頼した。これは今も有珠善光寺に所蔵される鉄眼道光開板一切経のことで、国指定重要文化財に指定されている。鸞洲の依頼通り大谷田善応寺（足立区中川）の一切経は蝦夷地へもたらされたのである。この鉄眼版大蔵経は黄檗宗の鉄眼道光（一六三〇―八二）が、隠元隆琦（一五九二―一六七三）が明から請来した大蔵経を天和元年（一六八一）に開板したもので、これによって大蔵経は日本国内に広く流布したのであるが、鸞洲はこの一切経所望の理由を「誠当国最初之法宝、夷境之鎮護不過之」としている。事実、鸞洲が蝦夷地に着任した文化三年（一八〇六）九月にはカラフトのクシュンコタン番屋にロシアの軍艦が来航し襲撃する事件が起こっている。世にいう文化露寇事件で、長崎におけるロシア使節レザノフとの通商交渉を打ち切ったことへの報復であるとされる。翌四年にもロシア軍艦の襲撃は続き、四月末にエトロフを、五月末には再びカラフトを襲撃し、次いで利尻沖で日本船を拿捕し積荷を接収した。まさに鸞洲が蝦夷地へ赴任した時期はロシアとの緊張状態が高まっていた最中であって、鸞洲が「夷境之鎮護」のために一切経を必要としたことも首肯されるのである。

文化三年六月二十日、鸞洲は有珠善光寺に着任した。翌日入院式を済ませると、土産を持ってアイヌの家々を挨拶回りした。有珠・虻田在住のアイヌへは風呂敷一枚ずつ、夫婦には京針二十本を贈り、これが不足すると手拭を渡し、乙名・小遣のアイヌへは酒を、その他には炊いた飯をふるまった。こうしたアイヌに対する施行は赴任前に準備していたのであるが、それが結実して後にはアイヌ五〇〇余名と有珠善光寺境内で百万遍念仏数珠繰りを興業している。なお菅江真澄『えぞのてぶり』に「いつも月のなからより末のころまでに通夜し、ねぶち（念仏）をとなへ、円居して大数珠をくりめぐらし、こゝろしめやかに居る」とあり、有珠善光寺建立以前から百万遍念仏が行われていたことが知られる。それはこの地に古くから信州の善光寺如来を祀る御堂があったからであるが、そうした宗風になじんだアイヌには鸞洲の教化を受け容れる素地が多分にあったのである。

文化十年（一八一三）八月十八日、有珠善光寺鸞洲・等澍院慈順・国泰寺萬全の隠居願が許可されると、鸞洲は八年間住持した蝦夷地を去って江

戸へ帰り伝通院に住した。ここで鸞洲は徳本を関東へ招き法筵を興業するなど日を送っていたが、後に知恩院門跡尊超法親王（一八〇三―一八五三）の准院家に任じられて権僧正法眼位まで僧階を昇った。晩年は准院家を辞したが、再び台命を受け常紫衣寺院である浅草誓願寺住職となり、天保十四年（一八四三）四月十九日、誓願寺に七十二歳で没した。

鸞洲撰『後世の枝折』は北海道で最も古い出版物だとされている。松浦武四郎『東蝦夷日誌・第二編』（一八六五）に、

文化四（丁卯）年五月俄羅斯乱の時には、処々仏幡を立て、土人に地を守らしめ、身は彼等が炮丸に死すとも、外夷の耻を受事なかれと教撫し、一紙の垂誡を作り、是と一枚起証に夷言を梓附にのせ、又後世の枝折といへる書を著して施し、又或時は大なる数珠にて夷民に百万返（遍）をくらしめし等も、其法筵に連る者五百人余、是此地にて念仏の始め也。

とあって、これが鸞洲の有珠善光寺在職中に執筆されたものと考えられるが、しかし伝えられる版本はいずれも無刊記本であって、北海道で最も古い出版物であることを示す証左はない。刊年が知られるのは明治二十七年三月に東京礫川宗慶寺から蔵梓されたものだけである。

管見では『後世の枝折』の版本には以下の三種が存する。

Ⓐ　東都白蓮社蔵版。　本文九行・二十三丁。
Ⓑ　東都白蓮社蔵版。　本文九行・二十一丁。
Ⓒ　東京宗慶寺蔵版。　本文九行・二十三丁。全三十一丁。

右の三種の版本にはいずれも鸞洲の序文があり、その尾行に「時は文化かのへ午の冬ゑみしか浦宇壽の山にすめる僧鸞洲しるす」とあるから、これが文化七年（一八一〇）冬に鸞洲が著作したものであることは疑いを入れない。しかしⒶ・Ⓑはともに無刊記でその刊行年時が不明である。おそらくⒶが初版と思われ、これより丁数の少ないⒷは字詰めを施し版面を改めた再刻本である。ⒸはⒶのまことに忠実な復刻本である。

版元の東都白蓮社は伝通院山内にあった学寮で、鸞洲撰『了誉聖冏禅師絵詞伝』（文政二年（一八一九）刊）に付された「無量山総境内之図」には白蓮社の社名が見え、また鸞洲の随従僧として蝦夷地へ渡った高弟大基の略伝中に「享和二年秋江戸礫川傳通院學頭智門寮に入り尋て鸞洲寮に轉す」（『大基上人略傳』「浄土宗全書」第十八巻所収）とあって、この鸞洲寮が白蓮社であると知られる。『後世の枝折』は鸞洲有縁の学寮から版行されたのである。なお、唯一刊記の存するⒸ東京礫川宗慶寺版に付された同寺十九世佐伯音海の序文によって、『後世の枝折』の版行事情の大凡が知られる。

此後世ノ枝折ハ吾ガ浄宗ノ大徳鸞洲上人ノ編述ニシテ東都無量山傳通院学寮白蓮社ノ蔵版ナリシモ今ヤ世ニ存スルモノ殆ント晨星ノ如ク又其梓木モ磨滅セリト聽キ予ガ先師常ニ之ヲ痛ミ之ヲ惜ムノ餘リ其再刻ニ志サセシモ果サズシテ世ヲ辞セリ遺憾ト謂フベシ今年十一月ハ其三年ノ忌ニ遭遇セリ思フニ幸ニ此好縁ニ際シ先師生前ノ遺志ヲ継キ之ヲ再刻シ聊カ報恩ノ一ニ答ヘ併テ著者ノ高徳ニ酬ハヾ不知扶宗ノ一端トモ為リナント遂ニ剞劂ニ附シ今其再刻成レリ

また吉水山朝覚院宗慶寺は伝通院末で、応永二十二年（一四一五）開山西蓮社了誉聖冏（一三四一―一四二〇）が高弟増上寺西誉の招請によって常陸国から江戸に来て当地に草庵を結んだのが起りで吉水山伝法院を称した。慶長七年（一六〇二）徳川家康の実母於大（伝通院殿蓉誉光岳智香大禅定尼）が逝去の折、当寺に入棺し菩提所とするよう命を受けたが、しかし当寺は境内が狭隘のため別に一宇を建立して菩提所としたのが無量山伝通院寿経寺である。元和七年（一六二一）家康側室松平忠輝母堂茶阿局を伝法院に埋葬し、局の法号朝覚院殿貞誉宗慶大禅定尼に因んで朝覚院宗慶寺と改めた。寛永年中に伝通院四世叡誉聞悦が中興して伝通院末となりし境内三千余坪を擁して栄えた。

『後世の枝折』の鸞洲序は文化七年（一八一〇）冬に記されている。つまり『後世の枝折』は文化三年九月の文化露寇と文化八年五月のゴロウニン事件の狭間に撰述されたのである。序文中に「成田氏なる居士」が訪ね来て法話を聴聞したことが記されていて、それが同書執筆の動機となったものと推測される。松浦武四郎は『東蝦夷日誌・第二編』に「一紙の垂誡を作り、是と一枚起証に夷言を梓附にのせ、又後世の枝折といへる書を著して施し」と伝えているが、アイヌ教化よりは和人の信仰に応じて著述されたものと考える方が実情に近いと思われる。ゴロウニン事件後、蝦夷地の監督警備に南部藩と津軽藩が藩士を増員派遣したのをはじめ、秋田藩が六〇〇人、庄内藩が三〇〇人、仙台藩が二〇〇〇〇人、会津藩が一六〇〇〇人を出兵しており、日露間の緊張状態が高まる中で、「成田氏なる居士」のように鸞洲の法話を求める藩士たちも多く存したことは容易に推量される。なお『後世の枝折』が蝦夷地で開版された証左はいまだ見いだせない。あるいは江戸で開版され、蝦夷地に送られたものとも考えられる。東京礫川宗慶寺版が東都白蓮社の板木が磨滅したことを伝えている。大部数が版行され、蝦夷地にもそれを需める人たちがいたのである。以下に版本三種の中でもっとも情報量の多い東京礫川宗慶寺版を翻刻する。

（宮本稿・関口補）

注

（1）木立大忍・木立真理・松下昌『蝦夷地善光寺住職記文化二年～文化三年』（蝦夷地善光寺日鑑・解読第二巻「蝦夷地へ出立編」七三―一二〇頁、善光寺刊、二〇〇五年）。

（2）宮本常一他編『菅江真澄全集』（第二巻一三五頁。未来社、一七九一年）。

（3）吉田常吉編『新版蝦夷日誌』（上巻七〇頁。時事通信社、一九八四年）。

（4）松本あづさ「第一次蝦夷地上地」（北海道史研究協議会編『北海道史事典』一九一―一九四頁。北海道出版企画センター、二〇一六年）。

〔翻刻〕

後世の枝折　全　」表題簽

鳳譽鸞洲上人著

後世の枝折　全一冊

東京礫川　宗慶寺蔵梓　」表見返

後の世も此よもともに

南無阿弥陀佛

まかせの身こそやすけれ　」序01オ

若我成佛十方衆生願生我國

称我名字下至十聲乗我願力

若不生者不取正覺

明治甲午三月　傳通院了寛書

〔印〕〔印〕　」序01ウ

後世之枝折序

鳳譽鸞洲上人ハ吾カ田嶋山誓願寺一代ノ之主ニシテ而乃チ第三十二世ナリ也特ニ奉シテ下台命ヲ上住持ス焉先レ是ヨリ師ハ礫山ノ之學匠シテ而徳亦タ高シ矣蓋シ師ハ稟性清雅英才慕レ聖ヲ愛スレ衆ヲ故ニ利生化縁最モ廣シ就レ中於テ下済生帷索上ニ見ル甚タ巧ナルヲ夫ノ於ケレ幹下旋スルニ徳本行者ノ之」序02オ東化上ヲ旦ツ上人関東結縁ノ之盛ナル謂ツテ頼ルト二師ノ之力ニ敢テ信レ勿キヲ二不可一矣還タ有リ最前一使下シム洲ヲシテ住中持セ于蝦夷善光寺上ニ窃ニ思フニ官有ルカ下亦タ深意上乎頼リ于洲ノ之徳ニ薫ニ陶感シ化シ夷族ヲ以テ有ルカ令ルニ謹ニセ北門鎖鑰ヲ乎可シ足ルニ以テ看ルニ師ノ之盡徳ヲ也時ニ法洲上人ハ建テ法幢ヲ於関西ニ鸞洲上人ハ曜カシ二法電ヲ於関東ニ二公秋菊」序02ウ春蘭各擅ニス其ノ美ヲ當時称ス浄家東西二洲ト矣其ノ芳名雷ニ于天下ニ是ヲ以テ幕府常ニ欽ス敬ス師ノ之道誉

殊遇異於他矣貴族ノ士婦及衆庶翕然風靡焉不亦宣乎嗚呼可謂陛矣洲在世利生ノ之間有法話集即称後世ノ之枝折者全偏行于世然舊鐫既老磨尓未廢陁矣爰」前宗慶寺主故領巖和尚様概之懐再刻ノ之志久矣未果帰西惜矣哉既聞和尚資性光霽卓識夙有純稟憬資ノ之誉座于宗廣教師之招再三焉所聘于曹洞宗學林之教師其ノ他雖美事名誉ノ之跡多畧于此而其ノ資佐伯音海氏継先師再梓之遺志遥物」擬洪思精勵修事焉其ノ至誠惑弓餘也矣已際上干剞劂予請序是鸞公ハ者所以有縁于吾山也予於茲不忍辞不遑揣亦不敏勿卒識蕪草珠鸞洲芳躅ノ之一斑以塞其ノ責云爾

干時明治二十有七年一月下浣

田嶋山誓願精舎第三十九世」

憐　雲臺謹誌　〔印〕〔印〕」

附言　南蓮社賜紫壽譽上人幻阿修道領巖大和尚十一月六日三回忌

以後吾ノ枝折ハ吾ガ浄宗ノ大徳鸞洲上人ノ編述ニシテ東都無量山傳通院学寮白蓮社ノ蔵版ナリシモ今ヤ世ニ存スルモノ殆ント晨星ノ如ク又其梓木モ磨滅セリト聽キ予ガ先師常ニ之ヲ痛ミ之ヲ惜ムノ餘リ其再刻ニ志サセシモ果サズシテ世ヲ辞セリ遺憾ト謂フベシ今年十一月ハ其三年ノ忌ニ遭遇セリ思フニ幸ニ此好縁ニ際シ先師生前ノ遺志ヲ継キ之ヲ再刻シ聊カ報恩」ノ一ニ答ヘ併テ著者ノ高徳ニ酬ハヾ不知扶宗ノ一端トモ為リナント遂ニ剞劂ニ附シ今其再刻成レリ願ハクハ永ク此書ノ弘通ヲ欲スルニアリト云爾

東京小石川極樂水浄土宗宗慶寺第十九世

明治二十七年三月　佐伯音海謹識

〔印〕〔印〕」

後世の枝折 序

吾を救ふ佛の教はなにはの法もめてたき物かゝるえをつくし立にし弥陀の誓ひこそをのかきはにあてゝはいとととふとけれ近頃成田氏なる居士の訪ひ来りて法の道知るへを問へるまに〳〵呉竹のうきふししけき世を厭ふよりわたつ海の深き佛の誓ひいと語らひしを沖津波かゝるゑみしか浦邊には佛の道たとる人のえ多かるにさなからきし」てよ友を誘ふによすかにもなさまほしといへるを憚の関の憚もせてかいつけぬるは印南野のいなみもやらぬわさならし浅香の沼の浅き水茎には見るへき言の葉も有ましけれとも入佐の山の入そむる法の道にはをのつから後世の枝折ともなり侍らんかし時は文化かのへ午の冬ゑみしか浦宇壽の山にすめる僧鸞洲しるす」

後世の枝折

夫受難くして失ひやすきは人界の身値がたくしてまれに得たるは佛の御法なりまさに何なる勤めをなしてか今生の思ひ出とはすべき一生むなしく過て後悔をなすことなかれ況や一度悪趣にいりぬれば万却にも出がたしたとひ二度人身を受るとも佛法にあふこと尤難しされば菩提の道にいりなん事此度にあらずばいつをか期せん速に仏の教に従ひて」

後世の営みをいそぐべし光陰移りやすく一生の齢早く傾き朝露頼みがたし四大の身脆くきゆ金殿玉楼もつひの棲家にあらず高名富貴ともいつまでの命ぞや顛倒の凡夫はかくともしらずしておきふし心に起るは貪瞋煩悩の迷ひ立居に身の営み流転輪廻の業なり五欲に着して昨日もいたづらに過三宝に帰せずしてけふもむなしく暮ぬ生者必滅の夕には父子の親しきも冥途の旅は別れ」ゆき会者定離の朝には夫婦のむつまじきも死出の山路に伴はずさしも身を苦しめてつみ貯へし財宝衣服は閻魔獄卒の責を償ふべからず心を労してもふけ置し田園舎宅もたそのいゑやしき紅蓮焦熱の苦みを防ぎ難し餓鬼に飢渇の愁ひあり畜生に残害の悲みあり三悪の火坑に堕いりなば千度悔とも及まじ過し月日のかへらねば唯行末ぞ近づきぬ老少不定の世にすみて後日の事を期すべきや頓死全くわかきを」ゑらばず重病老をまつ事なし有為轉変の境にはきのふ開け

し栄花も今朝はちり無常遷流の身なればこよひむすびし命露も暁また
ず消やせん静に思ひ見るに実あやうき娑婆なりけり此世のはかなきを見
て厭はざるは迷へるなり後生の苦みを聞て勤めざるは愚なりといひつ
べし後の世も我身なるべきを何ともならばなれと捨置べきことかは此理
を明らめて早く菩提の道にいり」02ウこの事を思惟して速に佛教を求むべ
し問ていはく実も受がたき人身既にうけ逢難き佛法幸ひにあへり眼に
さへぎる無常の世を厭はずしてありなんや速に勤め行ひて輪廻の郷を
離れんと思ふ然るに佛法廣くして教門旨深し何れの法を勤めてか我等定
めて生死流轉をまぬかるべき答て云衆生の機根に随ひて仏のおしへま
ち〳〵なり如説に修行せば顕密の法みな聖道を悟るべく漸頓」03オの教
同じく生死を離るべし然りと雖も釋尊出世の済度にもれて五濁悪世
の末に生れし我等は機根もにぶくして罪障また深し自力聖道の行は
企及べからずたとひ結縁下種の善根はあるべくも證悟何れの世ぞや
父をわすれて貧里にまよひ珠をかけて塵劫を送りなは三界の昇沈其苦
みいくばくぞやされば偏に他力浄土の得度を期し往生極楽を願ふべし
安楽集に曰末法の衆生信を立行」03ウを起すとも一人もうる者あらじ唯
浄土の一門のみありて通入すべき道なりと今は唯浄土の門に入て往
生を願ひ給へ問て曰極楽往生は目出度果報なり位高き菩薩ならでは
かなひがたしと聞り罪悪深重の我等いかでかたやすく生るべき答て云自
力を以報土の往生は実たやすからじ今は他力往生を勧るなり問て去さ
らば他力のいはれ具に示し給へ答」04オて云無量寿経に説給へる意は久
遠劫のむかし法蔵菩薩とてましませり濟度衆生の慈悲より六道の輪廻
をあはれと見給ひて助けばやと覚せども衆生の罪障重きのみならず戒
定慧の勤めに物うくしていよいよ三途の業を造りそふかくては所詮衆
生自力を以流転をはなれんこと多生にもかなふまじさればとて捨置な
ば苦海の波に漂ひて苦悩止時なかるべしと大慈大悲の御心」04ウより肝膽
を五却に砕きて思惟成就まし〳〵ければ世自在王如来と申佛の御前に
て其趣をのべ誓願を立給へり衆生の為にいたらぬ事なく御工夫あり
て四十八の大願を起し給へり一一の誓願我等が為ならずといふことな
し其中尤頼もしきは第十八の願に我佛となりたらん時十方の衆生
極楽に生れんと願ひて南無阿弥陀佛と申者は必ず生れしめんもし此願
かなふまじくばたとひ菩薩の行は成就する」05オとも衆生を捨て我獨り
仏にはならじと誓願し給ひ兆載永劫の間無量の功徳をつみあらゆる
難行苦行をも衆生の為にたへ忍びて遂に萬全萬行圓満し正覚の悟り
を開きて阿弥陀佛と号し奉り極楽の主となり給へりしかしよりこのかた
十却の星霜を経て衆生を引接ましませりされば最初本願の御約束に違
はず念佛申者は極楽に生れんと疑ふべからずもし生れずば仏に」05ウなら
じと誓ひて今現に成仏ましませば本願の約束相違なく往生するいは
れ明なり此によりて我等が身のよしあしはともあれ御約束に違はず念
仏して佛に任せ奉りなば往生を遂しめ給ふ事はひたすら仏の御力に
ありさしもつたなき我等念佛計りにて目出度浄土の果報を受んことは
おほけなきに似たれども佛の御力にて生れんには何の危き事かあらん喩
へば蒼蝿の少き羽にては幾程飛得べき」06にもあらねど足つよき馬の尾
にとりつきぬれば千里の道をも行くべきが如く我等はかひなき心行な
れども仏の本願力のつよきによりて極楽には生るゝなりかゝるを他力
往生とは申なり問て云実他力によらばたやすく後世を助りぬべし其他
力に乗ずるにはいかに勤め行ひてか本願にはかなひ侍らん答て云既に本
願に往生を志して念仏する者を生れしめんとの給へは南無阿弥陀仏と
唱へなば決定して彼国に」06ウ迎へ給ふべし但し餘の行もねんごろに回向
せば往生の行にはなるべきなれども弥陀の本願にあらずしてとり〴〵
の利益まじりけり戒定慧の貴き法にても往生極楽の道にうとければ疎
雑の行とて閣くなり千人の中三人五人は雑行にても生るべきなれども
専修念仏の百人は百人ながら生るにはくらぶべきにもあらねば今は唯
佛の本願に任せて決定往生の念仏を修すべきなり圓光」07オ大師も唯

往生極楽の為には南無阿弥陀仏と申て疑ひなく往生するぞと思ひとりで申外に別の仔細候はずと仰られたりとても自力にてかなはぬ往生なれば身持にても定むべからず心持にても定むべからず唯本願約束の南無阿弥陀仏と申てぞ決定往生すべきなり凡そ極楽に生れんと願ふ者彼仏の本願に順じなば往生を遂んこと定れる道理にあらずや此外に奥ふかき勤を加よともの給はず別の仔細」[07ウ]ありとも仰られねばとかくのうら思ひなく真心に念仏して萬は佛に任せ奉るべしさしも我等を往生させんとて心を五劫の思惟につくし身を兆載の修行にくだきて成就し給へる本願の念仏なれば十聲一聲も捨給はずと心腑に落着して一向に念佛し給へ問ていはく念仏は幾遍計り申て決定往生すべきや答ていはく善導大師上盡一形下至十聲一聲等定得往生と釈し給ひて往生を」[08オ]願ひて念仏申始るより臨終の十聲一聲までも必ず往生を得べしとなり日々の称名は一万以上十万返まで勧め給へり我分に應じて唱べし一万返もかなはぬ人は千返百返づゝも申べし一生日課相続せばみな往生を遂つべし念仏多ければ極楽の上品に生れ少ければ下品に生ると見へたり諸佛の国にもこゑし浄土なれば栄花の程は下品にてもたりぬべけれども速に智行圓満して六道の衆生を導んが」[08ウ]為には上品を期すべきなりかりの世の棲居だに貴きをうらやみ冨るを願にあらずやまして限りなき當來の果報なれば願ひを上品にあてゝ心行をはげむべし問て云経文に歓喜一念とあれば他力の往生は一念にたれり念佛多申は自力なりといふはいかに答て云夫は大なる僻事なり経文に乃至一念十念と説て乃至とは念仏申そめてより一生の終りにいたるまで唱るなり」[09オ]一念十念とは臨終に始て念仏にいり一聲十聲にて終る者まで必ず迎へ給ふ本願の不思議をあらはするなり此故に善導大師は一發心以後誓畢此生無有退轉唯以浄土居期との給ひて念佛門に入てより往生するまで唱へよとなり平生の一念に事たれりとは仏祖の教にあらず既に経釈に背る上は信用するにたらざるをやされば一念十念も決定往生すと信じとりて多念相續すべし一念尚生る況や多念をや」[09ウ]といと頼もし又自力他力とは論註の意は娑婆にありて自の三學の力をはげみ聖道の悟りを開くを自力といひ阿弥陀如来の本願に乗じ浄土に生じて成仏するを他力といふなり今浄土の行人は自身の三學なければ佛の本願念仏を以往生を願ふ是全く他力の修行なり何ぞ自力の勤めとせん多念仏申を自力といふはいまだ自力他力の訳をしらぬなり其上南無阿弥陀仏と云は阿弥陀佛我を助け給へと申事なりされば念」[10オ]仏多申はくり返し他力を頼むなり一念に事よせて多念を怠るは他力を頼む心の少きなるべし左様のひが事にまじろひで後世の大事をあやまるべからず信を一念にとりて行を多念にはげめとこそ圓光大師は示し給ひたれゆめ〳〵たがへる教を用ゆべからず問ていはく念佛の安心に至誠心深心回向發願心の三心ありと聞りいかなる心に侍らん答ていはく三心などいへば仔細ありげに聞ゆれども」[10ウ]我等が分に應じて發し給へる本願の安心なれば具し難き心にはあらず但し世にはことなる教ありてやすき安心も難きやうに勧めなし往生の信も立難ければ大すがたを能々心得て願生の心を決定すべしまづ至誠心とは念佛申心のいつはりなきなり深心とは罪悪の身なれども弥陀の本願に乗じて決定往生するぞと深く信ずるなり回向發願心とは此念仏を以極楽に生れんと願ふなり詮ずる」[11オ]所三心とは本願を頼む心なれば佛助け給へと思ふ心だにあれば三心は自らその中におさまるなり其故は罪多身のあさましければ佛ならではいかでとおぼゆるにつけてこそたすけ給へともおもはるれば深心もこれにこもれりその助け給へとおもふ心には露のいつはりもなきぞかしそれをこそ至誠心とも申せこのたすけ給へと思ふは即ち回向發願心にて侍るなり愚につたなき身は本願のくわしき事も思ひわかず」[11ウ]戒定慧のとる所もなく貪瞋癡のあやまりのみ多くして思ひと思ふことは後の身のあたなしとなす事は此世の営み名利の方には寝食も尚わすれ菩提の道には起居みなわづらはしかゝるあさましさにつ

けても佛ならでは後の世をいかにと思ふにはをのづから助け給へとは思はれぬべし其助け給へと思ふは即ち三心なれば身の程に應じて起りやすき心なり圓光大師は三心もふさねていへば一の願心なりとも示し又」12オ三心四修はみな決定して南無阿弥陀佛にて往生するぞと思ふ内にこもるともの給へりさればいかなる罪ふかき身も此念仏にて決定往生すと思ひとりて申居たるを三心具足の念仏とは云なりさらに異なる仔細なし但し罪あるをも助け給へばとてほしひまゝにつみ造るべきにあらず諸悪莫作衆善奉行は諸佛の通戒にて侍るなりすべて罪をかへり見ぬ者は身のわろき事をしらず身のわろき事」12ウをわすれぬれば又たすけ給へとおもふ心もなしたすけ給へと思ふ心をすゝめんためにもことに罪業を恐るべきなり本願にほこりてつみを心やすくおもふ人ははじめは信心のあるにこたりとものちにはたすけ給への心もなくなるべし能々用意あるべき事をやおほると佛法修業は心を先とすることなるに今往生極楽の心つかひもし深き仔細あらばつたなき我等は發し難かるべきを本願にかそへられたる安心は助け給へと思ふ計」13オりの心にてさしもはなれがたき輪廻の里を離れ生れ難き浄土に往生せんこと実多生の大慶なりと悲喜こも〻にぞ侍る問ていはく念佛はいかなる時も處もきらはず申べしや必ず佛に向ひ奉るにや答ていはく凡そ念佛申に平生行儀別時行を臨終行儀といふことありみな往生の業にたれり平生の念仏は時處を問はず浄不浄をゑらばず多念相續するを専一とすべし世わたるわざのしげ」13ウき人下根の輩などは此條こそつとめ易くして分に應じたれ萬機普益の行は平生行儀ぞ要なるべけれ別時とはもしは一日にもあれもしは七日にもあれ餘事を閣き念佛するなり其時は佛に向ひ奉り香花供物をもさゝげ身をも心をも清浄にして勤むべしかなはぬ者こそあれ志あらん人は家業の暇を計らひて別時の念佛を修し信心をも引立べし臨終は是に準じて行儀を調へ来迎をまちて念佛するなり此世に執心とあらん物は眷属より家」14オ財迄目にふれぬやうとり調へ知識を請じて十念をうけ浄土の快楽を思ひやう欣求の心を進めて正念に終りをとらんと計らふべし臨終は一期の大事にて仕なをすべきにあらねば平生より用意すべきことぞかし況や無常時をえらばねばけふが其日にあたらんもしるべからすされば日々の念佛を今ぞ限りと思ひはげますこそ臨終用心の肝要にてはあるべけれ扨も佛はいかにして申念仏をも往生の行に承とり給へども煩悩具足の我等を」14ウ無為涅槃の都に迎へ給ふ御慈悲を思ふには別時はさらなり平生とても心の及程は供養恭敬を盡すべし夢まぼろしの現世には金銀を惜まず衣食住を営み長き後生の勤めをば易きに事よせて麁略ならんは信心の薄き程もあらわれて佛の照覧もいと恥しかまへて心を用ひ給へ問ていはく日頃念佛の功つもりたりとも命終に臨みて病悩もつよく死苦もせまり正念みだ」15オれて終りなば年来の勤もかいなきか如く後の世の迷ひいとかなしいかに勤め行ひてか本意を遂ん答ていはく心を安じ給へ仏五劫の思惟には夫までも思しよりて起し給へる来迎の本願なりまづ第十八の願に念仏する者を生れしめんと誓ひ給ひて十方の衆生濟度の方便はゆるぎなくかまへあれども娑婆の魔境に棲るかなしさは命終の時に臨み苦痛にせまりて念仏怠るのみならず宿業競ひ起りて流轉の方へ引おとさんとす折を得て天魔さへ障」15ウりをなして正念を妨れば心も顚倒錯乱して既に三途に堕なんとすあやうしなどはいふもさらなるに仏は始めよりかくあらんと思しもふけて立給へる本願なれば念佛の行者今ぞ臨終の時と御覧じてあらかじめ慈悲を以加祐し給へば病悩もやみくはへたすく死苦もうすろぎて正念明かになりぬ来迎の儀式時をいそぎて聖衆現前し給へば宿業力を失ひ魔王跡をけす耳に涼しき法音を聞眼に妙なる尊容を拝し妄執雲はれて浄土に心すゝみ」16十念聲すみて観音の蓮臺にうつろふかゝる頼もしき来迎の本願あり何ぞ臨命終をあやぶまんされば臨終の正念は聖衆の来迎により聖衆の来迎は平生の念仏による事ぞと心得て平生の念仏をくり返し必す迎へ給へと佛に聞へ置給へ頼もしき

慈悲の父母にてうしろ見給ふ上は臨終の正念も佛の力にて相違あるべからずと平生の称名もいとゞはげまれぬべくこそ問ていはく浄土の行人は諸仏を念じ餘法を行」[16ウ]することはあるまじくや現世の祈りは餘尊へ申べしや答ていはく経に一向専念と説釈に一向専称とあれば極楽を願者は餘尊餘法を差置て念佛一行になるべきなり是全く彼佛の本願なる故なり本願の念仏は決定往生の行なるに何の不足ありてか餘の雑業を修し加へん餘行を修する暇あらば弥正定業の念仏を勤むべし不定往生の雑行を加へんこと其詮なきをや但し我修せぬ餘尊餘法とて輕しめそし」[17オ]べからず大ひなる罪をうることなり唯敬て頼まぬまでとしるべし餘行をさし置ことは称名の暇を妨ればなり念仏の障りにならぬ善根は値遇結縁すべし又厭欣の行者は現世を祈る様なし但し願生念仏の人は諸仏諸神も加護し給へばことさら祈らねどもをのづから除災獲福の利益あり是を不求自得の益といふ凡そ福を祈るは罪を止るにしかず幸ひを願ふは善を修するにあるべし唯心に慈悲あり て身によ」[17ウ]こしまの行ひなく他力の本願を仰ひで一筋に念仏せば弥陀は光明を以摂取し諸佛諸神も擁護の手をたれ給ふべければ災ひも轉じ幸ひも自ら来るべし既に地獄に堕べき者臨終十念の刹那に極楽へ迎へ給ふ不思議の利益まします阿弥陀仏なれば幾程なき果報をあたへ給ふ利益なからんやもし定業にて弥陀の御力にもかなはぬ事は何れの佛神の力にも及ぶまじされば何事も宿縁に任せて専心に念佛し仏神の御計らひにまかせん」[18オ]こそ心やすかるべけれ既に守護せんとの給ふ上は何の慮りかあらんや況や厭欣の行人は冨貴を見る事浮雲の如し手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にすみて幾程ならぬ名聞利養いのらずともありぬべし萬思ひにかなふ身なりともいつまでたもつ命ならん物の心にかなはぬにつけても娑婆を厭ひ極楽を願ふ縁となさばかへりて願生念仏の便りともなり侍らんかしまして浄業をなをざりにして現世を祈らん事は仏神の」[18ウ]本意にあらざるをや問て云臨終の来迎は天魔の所為と申人の候はいかに答て云夫は一向に浄土の法門不案内の説なり念佛者の臨終に来迎し給ふは弥陀の本願にて浄土三部経の説相分明なりもし天魔の所為と候はゞ謗法無間の罪業なり来迎の頼もしきいわれは上に弁じぬれば今更申に及ばず既に経文によりて念仏する者来迎にあづかるは仏説にかなふ上はゆめ〳〵疑ふべからず但し平生より無相離念」[19オ]の修行せし者の臨終に種々の相現じなば尤魔事といふべし平生の行に相違するが故に夫は聖道門の行者にある事なり本願念仏の人にはあづからず今浄土門の行人は本願を信じて来迎をまつ来迎ある事は佛説に符合せり心経既に相應す何のあやしき事かあらん唯称名して深く来迎を頼むべし必ず他門の説を以混濫する事なかれ問て曰念仏は必ず聲に出して唱ふべしや珠数」[19ウ]もち数定めねばかなふまじくや答て云口に称へ心に念ずる同じ名号なればみな往生の業なり但し称名の願なるが故に聲に出して申を本と心得て障あらん時は心に念じても宜しかるべし高聲念仏に十徳ありといへば聲に立るねん佛ぞ目出度覚ゆる又念仏だにも申せば数をしらねども決定往生の行なれど数定めねば怠りやすし但し珠数もつに便宜あしき人はたゞ心にかけて称名すれば佛ことゞ〳〵くしろしめし」[20オ]て本願成就の御胸に受とり給ひ一聲一念もすたる事なくみな往生の業となるなり正座十劫の昔より九品の浄土を荘厳し御目を見めぐらして極楽を願ふ者やあると御覧じ御耳を傾けて我名を唱ふる者やあるとよるひるにきこしめさるればしどけなく申ちうす念仏も聲々本願に受おさめて一念もむなしき事なく決定往生の行となるなりけにも易行の本願とわが身の上にも勤め得べくとよよ頼もしくこそ」[20ウ]問て云極楽の荘厳目出度とまでは耳なれたれどもおろ〳〵其いわれを聞侍りて欣求をまさん答て云四十八願より成就し給へる不思議の果報なれば佛すら説盡難しとの給へりまして凡夫のいひつぐべきには侍らず抑一生念仏の功つもりたりししるしには臨終時到りぬれば本願の約束違はずして自ら来迎まし

ませり紫雲軒をめくり音楽空に響き聖衆床にのぞみて異香室にみつ光明我身をてらせば」21オ罪障悉く滅し三昧現前して満徳の尊容を拝す草の庵りに露の命きへぬれば既に蓮臺に趺をむすべり須臾に浄土に往生して蓮花の扉圓かに開ればいつしか紫金の膚忍辱の衣にかゞやき宝冠のよそふひ解脱の瓔珞にはへたり三十二相備りて三明六通明かに五妙の境界意に任せて見るも楽しく聞もたのし宝池宝岸には八徳の水堪然とたゝへ高楼高閣は七寶の飾り煥爛とかゞやけり地は瑠璃をしきて」21ウ金縄さかひをなし樹は珠玉をみがきて香風にほひを送る諸天花をちらせば宮商の楽耳にたのしく童子袖をひるがへして回雪の舞眼をよろこばしむ泥洹常住の栄花なれば退没のなげきなく歓楽思ひをきはむれど哀情を催す慮りなし神通自在の身となりて宿縁の者を導き六道の岐に遊びて普く無縁の衆生をとむらふ観音勢至と利生の方便をかたり普賢文殊と菩提の願行を議すかゝる諸の上善人と會する事」22オおほけなき果報にあらずや上品臺上に進みて弥陀の尊顔を瞻仰し微妙の法門を聞て無生忍の悟りを開く朝なく他方浄土に遊びて諸の如来を供養し百千三昧を得て三菩提の記別をうく退縁外にたへ貪瞋内に滅し十地の願行自然に成就して妙覚果満の位をきはむ如レ此逍遥無レ極リ處吾レ今不シテ去待ニ何レ時ニすべて無邊の快楽はみなこれ弥陀願力の所成なり他力難思の巧方便静に思ひつゞくれば涙もこぼれがちなり」22ウかゝる勝縁にあひて輪廻を離れんこといかでか一すぐる世の善根ならんはやく萬事をなげうちて称名の数遍をはげみ佛の願力に乗じて常楽の国に帰るべし一生蹉跎し易し時を失ふ事なかれおもひはかゆかず　此度をかきりにはせんと思ふ哉みも受かたく法も得かたし

後世のしをり終　」23オ

鸞洲大和尚之畧傳〔印〕

武江誓願寺鸞洲僧正は筑前の人なり博多妙圓寺演譽の嫡弟にして傳通院賢洲上人の資なり中頃京師に游学し性相の門に入り忽然として道心を發し南紀吉田の庄に德本行者を訪ひ三昧發得を期せんことを誓ひ専修の一行に歸す有田の庄須ヶ谷に好相を感見し弥道念を強」23ウ固にす後賢洲上人の警策により礫山に帰錫して學席を履み遂に台命を奉して北海道有珠善光寺第二世に居し土人を勧誘す土人の化に服するもの他に其の比類を見ず適母公病あり辞して筑紫に孝養せらる其の后哉程なく華頂王宮より召され侍讀となる大僧都を経て僧正に任せらる再度台命ありて」24オ江戸浅草誓願寺に移り勇法幢を樹つ僧正雄辨卓説貴賤既服其の法澤に沾もの数を知らず天保十四年四月十九日七十二齢にて逝す翔蓮社鳳譽と號す不肖は僧正の法蹟を嗣き有珠山第十世として住化すること三年自ら宿契の浅からざるを信す今年僧正の法孫宗慶寺音海氏は師領巖上人の志を継き故僧正の遺稿後」24ウ世の枝折を梓して両師の恩に報答せらる至孝といふべし余曩きに東台の慧澄和上の後世の枝折を鐫木す同名なれとも其の趣を異にす慶哉僧正の小傳を叙するにあたり自ら値遇の空からさることを深く信し光明山の南窓に書して以て樂水の海師におくる

明治廿七年二月上浣東京城南釋琇宏識〔印〕〔印〕」25オ

明治二十七年三月十日印刷

同　　年三月三十日発行

翻刻印刷　東京市小石川区久堅町百壱番地
兼発行者　佐伯音海
東京々橋区南傳馬町
発賣所　宇田總兵衛」25ウ
」裏見返
」裏表紙

［資料4］『蝦夷地大臼山善光寺縁起』

有珠善光寺の根本史料である『蝦夷地大臼山善光寺縁起』を翻刻紹介する。同書巻末に「蝦夷地大臼山／善光寺幹事誌／文化三丙寅年十月既望」とあって、これが鳳誉鸞洲の善光寺二世晋山間もない文化三年（一八〇六）十月十六日の版行と知れる。版行の責任者「善光寺幹事」はおそらく鸞洲に随従して蝦夷地に渡った高弟の常蓮社立誉行阿大基だと思われる。浄土宗全書第十八巻『略傳集本會』所載「大基上人略傳」に「鸞洲上人に随従して蝦夷に入り善光寺の幹事たること四年」とあって、大基は文化三年から文化六年まで有珠善光寺幹事を務めていた。後に大基は学僧として高名を得るが、六月の着任から倉卒の間に『蝦夷地大臼山善光寺縁起』をまとめ得た大基の力量識見は注目に値する。

蝦夷地における善光寺信仰の記録は、松前家の事蹟を記した『新羅之記録』（一六四六）が最古である。これによると松前藩初代慶廣（一五四八―一六一六）が慶長十七年（一六一二）冬夢告によって善光寺如来御堂を建立したと伝え、また寛永十七年（一六四〇）には駒ヶ岳噴火と津波によって大きな被害が生じたが、慶廣造営の善光寺如来の御堂は奇特にも無事であった記している。おそらく大基はこうした既存の資料を十分に摂取したものと思われる。

「大基上人略傳」等によれば、大基は天明五年（一七八五）五月肥前国高来郡島原北有馬村（現長崎県南島原市）に吉村伝六の次男として生まれ、寛政八年（一七九六）久留米心光寺弁乗の膝下で剃髪し、享和二年（一八〇二）秋に江戸に出て小石川伝通院学頭智門寮に入り、次いで鸞洲寮に転じて寮主鸞洲の弟子になった。文化三年（一八〇六）五月、鸞洲の有珠善光寺晋山にともないこれに随従し、鸞洲が退任する文化六年（一八〇九）十月まで同寺幹事を務めた。

その後、大基は上京して天台を一誉律師に、唯識を慈海阿闍梨に、華厳を典寿律師について修学し、増上寺大僧正典海が鸞洲と諮って紀州の念仏行者徳本を江戸へ招請したとき、大基が使者となって徳本のもとに参じた。以来大基は徳本に随従することを望んだが徳本はこれを許さず、大基は小石川伝通院山内華王窟の住職となって江戸に残った。すると同十三年（一八一六）正月に一文字席に上がり、同十五年（一八一八）正月には月行事に昇進した。

文政元年（一八一八）十月六日、徳本が小石川一行院で没した後、大基は天保三年（一八三二）九月、尾張徳川家の招請により同家菩提寺の徳興山建中寺（名古屋市東区）の住職となった。同五年（一八三四）十月、徳本の十七回忌を建中寺で修したところ、参詣の信者は一万二千人に及んだという。

その後、弘化三年（一八四六）五月建中寺住職を辞して山内の正信院に寓居し、さらに聖衆来迎庵に隠室した。嘉永五年（一八五二）五月伝通院へ草鞋料一〇〇〇金を寄付したほか有縁寺院に三〇〇〇金を寄付し、文久元年（一八六一）四月には熱田雲心寺の三門を新築し、翌二年には熱田大神の夢告をうけて同寺に丈六阿弥陀如来像安置のために五〇〇金を出費し、弟子大周を監督として同三年に完成させるなどし、明治三年（一八七〇）二月二十五日、八十五歳で没した。時に弟子三〇人余、多くの学僧を輩出した。著述・校訂の出版は、『当麻曼陀羅講義』・『尾陽往生伝』・『勧誘同法記』・『無量山戒誘達亮僧正伝』・『五重伝法十門分別』・『元祖嘆徳和讃』・『鎮西国師行状和讃』・『徳本行者行状和讃』・『傳通記』等がある。大基は幕末から明治初期にかけて活躍した浄土宗の学僧だった。

『蝦夷地大臼山善光寺縁起』の板木は有珠善光寺に現伝するが、翻刻の底本を函館市中央図書館蔵『蝦夷地大臼山善光寺縁起』（請求記号〈K－185－エソ－5001〉）に採った。縦二五〇㎜・横一八五㎜、袋綴仮綴装。墨付四丁、摺面三丁半、四丁目裏を裏表紙とする。

（宮本稿・関口補）

［翻刻］

蝦夷地大臼山善光寺縁起

」表紙　」表見返

善光寺縁起

抑蝦夷地大臼山善光寺の濫觴を尋るに人王五十三代淳和天皇天長年中叡山慈覚大師東国游化ありて奥州南部恐山に登り此や日本の限りならんと地蔵菩薩の像を彫刻し一宇を結びて安置し給へり今奥州の霊場たり扨は日本の内仏法弘通遍ねしと喜ひ海上を望み給うに積水渺漫として波浪天を洗ふ雲霧のあなたに一嶋あるが如し地脈は尽れども大師の慈悲は限りなく眼前に衆生界の度すべきあるを余諸にみて止なんは仏の知見も恥つべし我願海も尚浅しと弘誓鎧を着て一葉の扁舟に棹さし激浪を凌ひで向の岸に着給へは（一説に津軽外ヶ浜より渡りたまふといへり）果して大国あり」01オ夷人穹廬をならべ被髪文身にして王化もいまた及はず侏□鴃舌の様機感殊に疎し、大師の慈心は深重なりと雖無縁の衆生は下種すら尚難し錫杖を振ひて峻嶺の峨々たるをよぢ納衣をむすびて、渤海の漫々たるにそひ村々を訪ひ戸々に立て勧誘し給ふといへども発心帰仰の輩もなしこは心憂事かなと幾度か大悲の涙を忍辱の衣の袖につゝみ兼給ひけん扨しも此国にも諸仏所化の衆生界には洩しものを仏性内薫の発現し難きは熟脱時至らぬなるべしさりとても仏の因行には寸方も捨身の地にあらざるなし成仏の光益何ぞこの地に及ばざらん三宝感応の地あらば当来利物の因縁をなし置んと、山川遥に越、行東蝦夷地の海岸大臼の麓に来りて江山の有様」01ウ心とまりて覚え給ひしかば樹下の石に草を敷ひて一夜を明し終夜弘法利物の回顧して衣にかくる珠よりも木の間の袖の梅雨しげく四無量三昧に入て悲願ねもごろにましませし暁にふりさけ見れは峯に残れる有明の月ならで瑞光耀々として紫雲靉靆たり大師未曾有の思ひをなし峯頂を望み給ふに奇なるかな一光三尊の阿弥陀如来雲間に住立まし〳〵光明遍ねく照して山海金色となりぬ大師は尊顔を譫仰して礼拝讃嘆し一心合掌して広度衆生の志願を述給ふに忝も如来微笑して告給はく我衆生を待て心に間断なし汝か発願こそ我本懐に称へり然りといへども、時いまだ到らず汝唯利生の縁をなし当来の益を期すべし我跡を信州善光寺に垂ると」02オいへども今より此地に影向して機縁を調停すべし汝が願心わが大悲に薫じて歩みを此地に運ふ者は往生浄土の勝因たらんとねんころに示し給ひぬ大師はまのあたり金口の霊告を得て歓喜斜ならず当来此地に於て仏事を施作し広く衆生を利せんと渡海の志願満足せりと雲にかくれ行く真容をうつして木造を彫み藜を折りて小宇を結び安置し奉りて当来の利物を願じ日本へ帰り給へり是すなはち本尊降臨の縁由善光寺と呼ならはせる基本なり其後長録三年宇須峯に和人多く入り込住居し、嘉峰和尚とて高僧の有しを請し慈覚大師旧蹟に堂舎を建立し随岸寺と号せり（今に松前の在福島法界寺は此時の末寺の由村の記録にみゆ）程なく」02ウ夷人蜂起の事ありて和人引払ひし後は寺も破壊して僅に九尺の小堂あり善光寺と呼へり回国修行の者は必す来りて堂に詣て山に登る事になれり（堂内に鰐口二ツあり元亀年中と天正年中の作なり）此堂に通夜する者微妙の鐘の声を聞こと昔しより今にあり法苑珠林等に記る聖等の類なるべし（松前家第二代領主此堂再興ありしよし旧記に見ゆ）寛文六年江州伊吹山平等岩の僧円空渡海して此堂に来り慈覚大師の作の損せし仏像を模して改め刻みて安置す（此外多く仏像を刻み諸所に安置し此堂にも九体をあり、何れも其の処の本尊と銘ありしかば御開国後各その説の通りに安置す）享保年中津軽外ヶ浜寺主貞伝和尚木造の長く持ち難きをいたみ唐金にて鋳移し安置せり（此像始め大臼山の上に安置せし明和の頃山上火起りて草木悉く灰塵となれり此像海辺の堂に移り給ひて堂の森には清風起り小雨そゝぎしかば此堂なく存せり此森古木多きは山焼をのがれし故也今に夷人いひ伝へて此森の木をきる事なし」03オ享和二年此堂に詣し者失火して鰐口半鐘等まて尽く焼砕けしに本尊のみ残り給へり程なく小堂を構へて始の如く安置す然るに寛政の末征夷大将軍家斉公蝦夷地御開国ありて王化漸く布り、仏法をも弘通すへしとて文化元甲子念大臼山の麓に新寺御建立あり増上寺倫誉大僧正の奏によりて善光寺と寺号を賜ふ（弘法の僧もまた大僧正推挙あり丹後の祐誉荘海和尚台命を奉して弘法の為渡海ありしが、不幸にして遷化あり相次て量山の鳳誉鸞洲和尚官命によりて渡海住山しはしめて開法せらる）本尊には前来小堂にありし貞傳和尚作の阿弥陀仏を安置せし

め給ひて蝦夷地仏法最初の精舎となれり（前立本尊は増上寺倫誉大僧正の造立也）抑九百年の昔慈覚大師慈悲利物の誓願より渡海ありて善光寺如来の出現を感し末代仏法有縁の地なれは長く跡をたれて衆生を導んと」03ウ誓ひ給へる霊告に違わず今に及ひ精舎御建ありて穹廬の漁夫も共に摩尼の珠を掐り左衽の夷婆も口に甘露の名を唱ふ偏に国家の外護により如来懸記のむなしからざることをしりぬ近里の老幼浄信を発し去ル者日を数へて、いよ〳〵進み遠鏡の男女勝縁を尋ね来る人年を追てます〳〵多し実も如来降臨の霊地末法有縁の名藍なるものをや流れを尋て河源を窮む遂に解脱の峯ならず、歩みを運びて道場に至る即ち安養の路に臨めりそれ仏種は縁より起る言を有信の輩に伝へん

蝦夷地大臼山

善光寺幹事誌

文化三丙寅年十月既望

」04オ

」裏表紙

［資料5］『念佛上人子引歌』

有珠善光寺三世響誉弁瑞撰『念佛上人子引歌』を翻刻紹介する。本書の版木は有珠善光寺に現伝する。それは善光寺七世仙海が復刻したもので、弁瑞の開版したという版木も、また四世弁定が開版した版木も失われている。和文にアイヌ語文を併記した『念佛上人子引歌』は北海道におけるアイヌ文化を理解する上でも極めて貴重な資料といえる。弁瑞は念仏をもって教化に精励したので念仏上人と呼ばれて仰がれた。

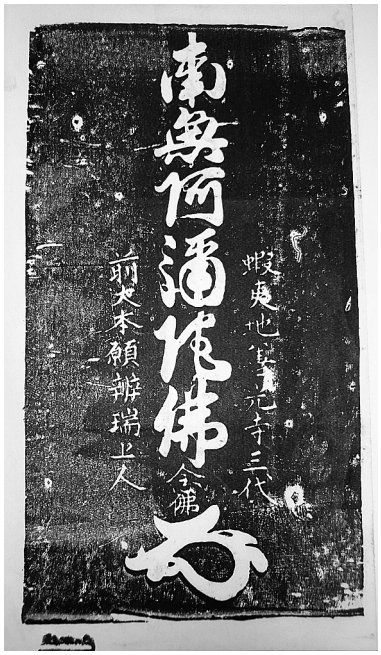
※

弁瑞は羽州山形の人で佐藤嗣信の孫という。幼時に逐電した父を探すために禅宗で出家して全国を行脚したと伝える。のち浄土に転宗し十七ヶ寺で修行後、磐城二本松台運寺随応に十年間師事し、文化年間初め頃に下総行徳徳願寺の住職となった。蝦夷地へ渡海する直前は江戸深川霊岸寺にいたようで、また二世鸞洲と同様徳本の法弟であった。文化十一年（一八一四）八月二十九日に江戸を出立し、十二月二日に有珠善光寺に到着した。

文政四年（一八二一）秋、弁瑞は『結縁同行蓮華講中勧化和譚』を作った。須藤隆仙氏「アイヌ語の信仰歌『念仏上人子引歌』について」によれば、この和讃は昭和五十二年（一九七七）の有珠山噴火まで続けられた「お山かけ」と呼ばれる有珠山登拝の時に称えられたもので、昭和四〇年（一九六五）頃まで北海道や青森県の一部で唱えられていたという。翌五年（一八二二）閏正月一九日有珠山が噴火した。ために弁瑞は本尊を守護して避難し、フレナイ（虻田町）・ベンベ（虻田町）と移動し、ヤマクシナイ（長万部町・八雲町）に阿弥陀堂（現円融寺）を建てて避難生活を送った。以後任期中に有珠に帰山することはなかった。『善光寺過去帳』によると、江戸に戻った弁瑞は文政八年（一八二五）正月二十五日、深川霊岸寺旅宿で没したと伝える。なお「上野の唯念」で知られる木食向誉唯念は行徳徳願寺以来の弟子である。

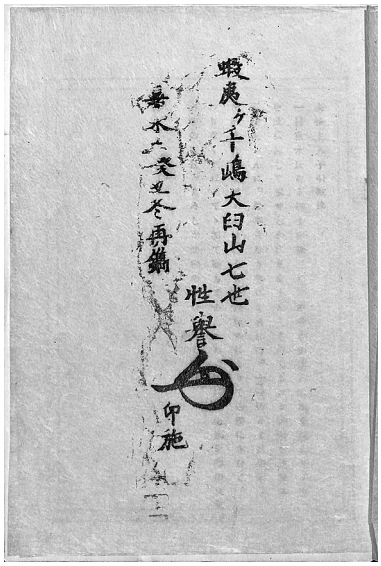
天保三年（一八三二）、有珠善光寺四世弁定は『念佛上人子引歌』を開板した。三世弁瑞に随従して蝦夷地へ渡った。豊浦町の坂の上観音堂の鰐口には「善光寺霊所岩谷山什物願主辨定／文政三年辰施主松前竹屋善吉」とあるので、有珠山噴火前から弁定が寺務を執っていたことが知られる。文政八年（一八二五）十一月六日善光寺四世住職に任命され、翌九年十二月三日、避難先のヤマクシナイ阿弥陀堂で晋山入院式を執行した。弁定は善光寺を鷲ノ木（現森町）へ移転することを寺社奉行へ願い出たが実現せず、任期中の有珠帰山も叶わなかった。

天保三年（一八三二）六月、弁定は隠居して持明院と称し、『念佛上人子引歌』に序文と自作の和讃を追記して開版した。



当初の表紙には右掲のように「蝦夷地善光寺三代／南無阿弥陀仏　念佛（花押）／前大本願辨瑞上人」とあるが、後には弁定の別号「佛彦」を刻して版行した。また隠居後も活躍したようで、善光寺では弁定が僧侶でありながら軍学に詳しく、馬術にも優れた多才な人物であったと伝えている。なお晩年の消息は不明であり、弁定開版『念佛上人子引歌』の板木も現存しない。

弁定版を復刻したのが有珠善光寺七世性誉仙海である。仙海は長州萩の農家に生まれ、同地の瑞雲山報恩寺で得度し、文政四年（一八二一）増上寺学寮に入って修学した。天保九年（一八三八）、急死した善光寺五世貫誉弁諦の院代として蝦夷地へ渡り寺務を執った。弘化四年（一八四七）江戸へ帰り、嘉永二年（一八四九）駒込専念寺の住職となったが、嘉永四年（一八五一）善光寺七世住職に推挙され、翌五年七月九日晋山入院した。その翌六年（一八五三）再び有珠山が噴火したため、仙海はヲシヤマンベ会所へ避難し、ここに仮堂を建て本尊を安置した。同年冬『念佛上人子引歌』を復刻し、その刊記には、「蝦夷ヶ千嶋大臼山七世／性譽（花押）印施／嘉永六癸丑冬再鐫」とある。



安政五年（一八五八）、仙海は有珠に帰山し、末寺建立に奔走したが、明治三年（一八七〇）十二月、病を得て住職を辞し函館新善光寺（現称名寺）に隠居し、明治五年（一八七二）六月二十四日、同寺に没した。

なお、仙海が『念佛上人子引歌』を復刻した事情について、須藤隆仙は仙海が増上寺の蜜童和尚に宛てた消息を紹介された。

一翰奉啓上仕候。向暑の節に御座候得共、大僧正様益御機嫌能被為遊御座恐悦至極に奉存候。随愚寺儀去る丑三月以来山焼にて今以相

鎮不申、右故本尊等守護仕行程十二里相隔候ヲシヤマンベと申処へ立退罷在候。而蝦夷人共立退候場所へ為教化時々見廻候に、一同必死の難渋不忍見聞誠に悲歎至極に御座候得共、時々酒飯等施行仕候得共、長々の事にて施行等も相成兼、且相続も難出来難渋集尽愚筆候に付、不得心御役所へ拝借金奉願上候間格別の御慈悲を以速に御聞済被成下置候宜御内奏願上候。恐惶謹言

寅四月廿日

蝦夷地仙海（花押）

蜜童和尚御披露

須藤氏は右の消息から、仙海は「非常時にアイヌたちの精神的救済を目的」として『念佛上人子引歌』を復刻したものだとし、さらに松浦武四郎『東蝦夷日誌』二編に載る『念佛上人子引歌』は、アイヌ語表記が仙海復刻版と若干異なり、弁瑞の初版本に拠ったとも思われないから、武四郎は不確実な写本を引いたものだと結論されている。

有珠善光寺に現伝する仙海復刻版『念佛上人子引歌』の板木は国指定重要文化財に指定されていて容易な摺版を許さない。幸い道史研究で著名な高木崇世芝氏が版本三点を所蔵されている。氏はすでに「幕末・明治初期の出版物」にそれの紹介をされているが、このたび快くそれの閲覧・撮影の機をお恵みくださった。ついて以下に報告しておきたい。

Ⓐ縦二五〇×横一八五㎜。半紙縦二つ折り三枚綴り。一紙の表表紙と裏表紙、四穴紙縒りで綴じられている。表表紙中央に「念佛上人子引歌全」とあり、右下に「蝦夷地／善光寺」の角朱印が押され、裏表紙に「有珠／善光寺／印章」の丸朱印が押されている。裏表紙見返に貼紙（縦一九五×七〇㎜）があり、「大正十三年九月六日北海道／漫遊途次霜有珠善光寺時執筆／井上賢明師御恵贈／夷山」と記されている。大正十三年（一九二四）に刷られたものと思しい。今回、これを底本として影印を付して翻刻する。

Ⓑ縦二六〇×横一七五㎜。半紙縦二つ折り二枚綴り、一紙の表表紙と裏表紙、これと市立函館図書館Ｂ５版罫紙に序文・翻刻文四枚を付したものが綴じられている。表表紙左に「念佛上人子引歌全」とあり、見返に「蝦夷地善光寺三代／南無阿弥陀佛念佛（花押）／前大本願辨瑞上人」とあり、裏表紙見返に「蝦夷ヶ千嶋大臼山七世／性譽（花押）印施／嘉永六癸丑冬再鐫」とある。

なお高木氏によると、本資料に市立函館図書館罫紙が補綴されていることから、これが同館（現函館市中央図書館）館長であった元木省吾氏（一八九二―一九七三）の旧蔵かという。元木氏は昭和二十七年（一九五二）に市立函館図書館長に就任し、書籍の充実に努める傍ら『函館市史』編纂委員を務められた。元木氏旧蔵本とすると、昭和二十年代に刷られたものと思しい。

Ⓒ縦二六三×横一八三㎜。半紙縦二つ折り三枚綴り、一紙の表表紙と裏表紙、これにウス善光寺が付した翻刻半紙二つ折り三枚綴り、Ｂ４版「臼善光寺沿革」が併せ綴じられている。表表紙左に「念佛上人子引歌全」とあり、見返に「蝦夷地善光寺三代／南無阿弥陀佛念佛（花押）／前大本願辨瑞上人」とある。裏表紙に仙海の花押はない。

本資料は、高木氏御自身が昭和四十一年（一九六六）有珠善光寺に参詣した折り印施を受けたものという。当時、希望する参詣者には百円の喜捨で住職手ずから印施したという。

有珠善光寺三世弁瑞作『念佛上人子引歌』の七世仙海復刻本の板木は、北海道に現伝する板木として最古のものという。『念佛上人子引歌』はアイヌ語文が併記されていることから、これをアイヌに対する布教の証拠だとして注目されてきた。しかし高木氏蔵本からも知られるように、近代以降も刷り続けられたことをみると、アイヌに対する布教のほかに

も本資料が有する問題は少なくないように思われる。佐藤知己氏が『念佛上人子引歌』にはアイヌ語訳に誤訳と考えられる箇所を指摘されているが、弁瑞の時代におけるアイヌ語学習の動向研究も大切な課題であろう。ただ三世弁瑞はじめは四世弁定・七世仙海らがアイヌの人たちに浄土教の精神性を伝えようと懸命に努めていたことは疑いない。もって翻刻するゆえんである。なお資料調査と翻刻の掲載を快諾され、御教示まで下さった髙木崇世芝先生に御礼申し上げる。また谷本晃久先生には種々御教導を頂戴し、資料調査には岩渕真由子氏の御助力を得た。末筆ながら御礼申上げる。

（宮本稿・関口補）

注

（1）須藤隆仙「アイヌ語の信仰歌『念仏上人子引歌』について」（『大正大学学報』二四号、一九六五年）。

（2）関口靜雄・阿部美香・宮本花恵『静岡県小山町滝沢山唯念寺所蔵什物調査報告』（『昭和女子大学文化史研究』一七号、二〇一四年）。

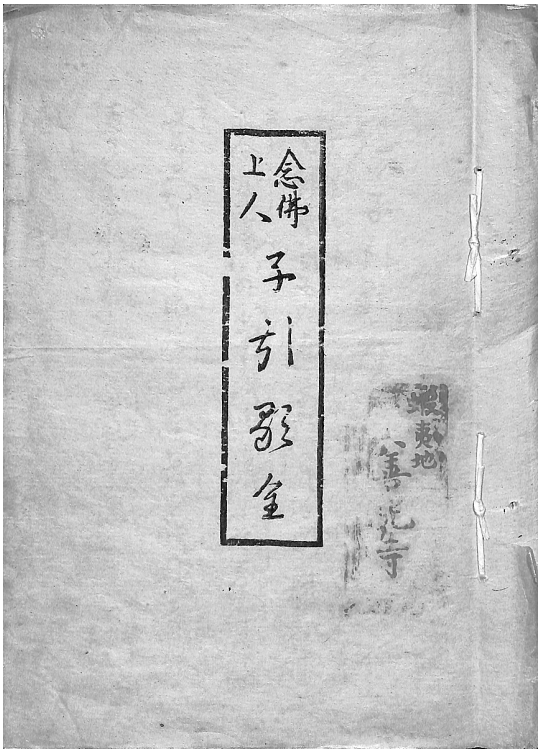
（3）吉田常吉編『新版蝦夷日誌』（上巻所収。時事通信社、一九八四年）。

（4）髙木崇世芝「幕末・明治初期の出版物」（北海道の出版文化史編集委員会編『北海道の出版文化史』一五頁。北海道出版企画センター、二〇〇八年）に『念仏上人子引歌』について言及がある。

（5）佐藤知己氏「伊達地方のアイヌ語方言の言語的特徴」（『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』一四号、二〇〇八年）。

［追記］『後世の枝折』『善光寺縁起』『念佛上人子引歌』の翻刻文校正に昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科二年柳川亜美さんの助力を得た。

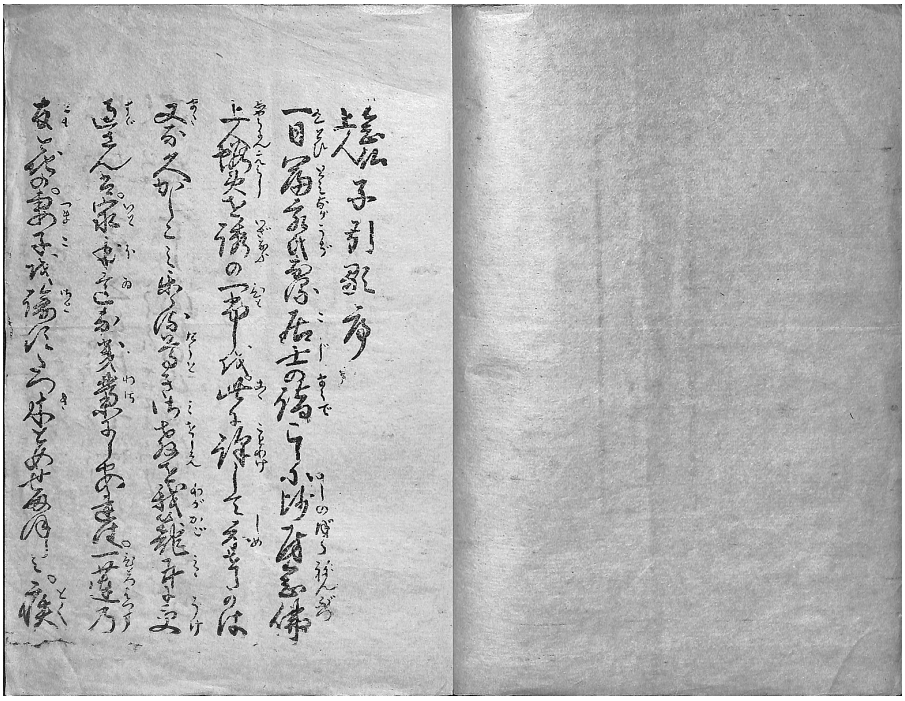
［翻刻］



念佛上人子引歌全

〔蝦夷地善光寺〕（朱印）

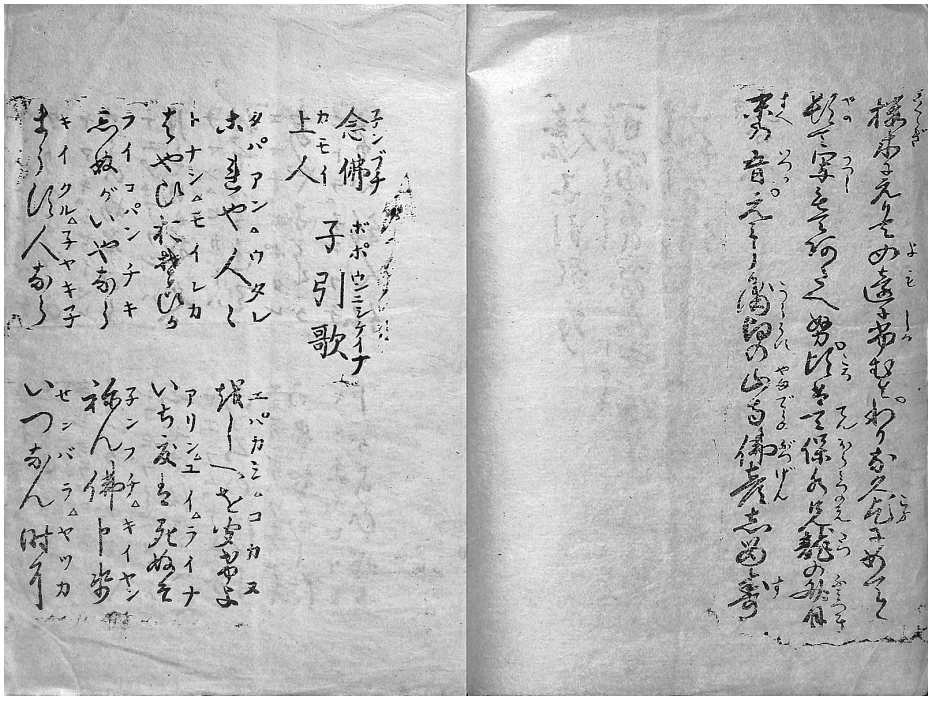
」表表紙



念仏上人子引歌序

一日冨永氏なる居士の詣こしに師房念佛
上人蝦夷を誘の一ふしを此に訳して示せしかは
又なくかしこみたる尊き御教を我籠耳に
過さんは。最本意なき業にしあれは一蓮の
友と此の妻子を諭すたつ木とめせまほしと。疾

01オ　表見返



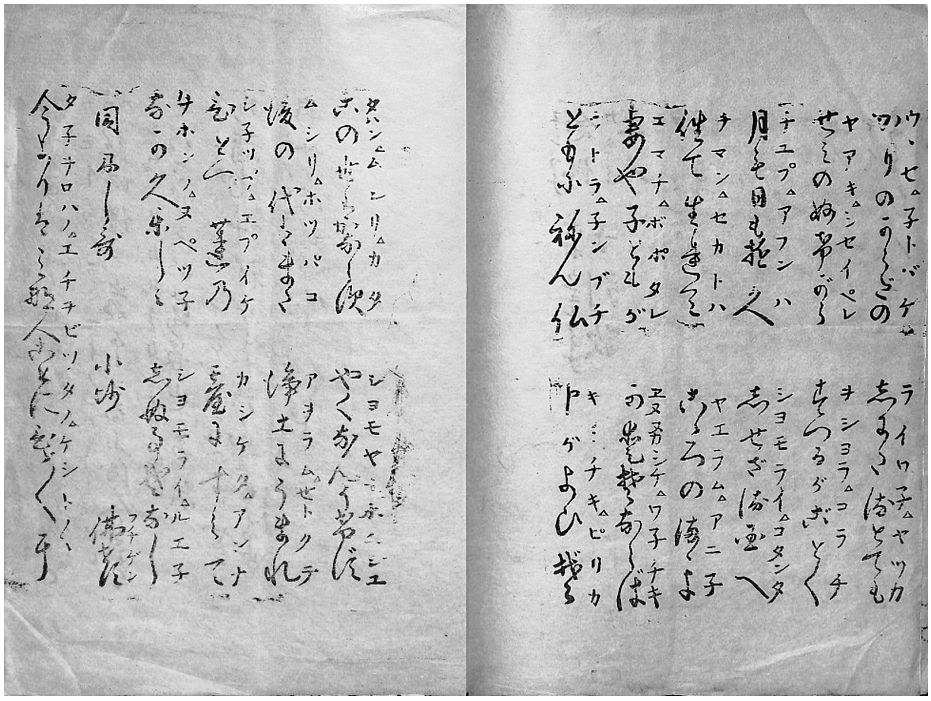
楼木にえりて四辺に布むと。わりなく乞にめてゝ
頓て写もてあたへぬ。頃は天保水兄龍の册月
末の五日。えみしか浦臼の山寺佛彦しる壽

01ウ

念佛子引歌
上人

タバアンウタレ　これや　人〻
エバカシコカヌ　をしへを聞けよ
トナシモイシカ　はやひ　おそひか
アリンユイライナ　いち度は死ぬそ
ライコパンチキ　しぬがいやなら
ネンフチキイヤン　ねん佛申せ
キイクルネヤキネ　まうす人なら
センバラヤツカ　いつなん時に

02オ



かりのからだの　　しにたるとても
ウ、セ△ネトバケ　　ライワネ△ヤツカ

せみのぬけがら　　すつるがごとく
ヤアキ△シセイペレ　　ヲシヨラ△コラチ

月も日も逝く　　しせざる国へ
チユブ△アフンハ　　ショモライ△コタンタ

住て生れて　　こゝろのまゝに
チマン△セカトハ　　ヤエラム△アニネ

妻や子ともが　　可愛そならば
エマチ△ポポタレ　　エヌカシケ△ワネチキ

ともにねん仏　　申がよひぞ
ウトラ△ネンブチ　　キイチキ△ビリカ

02ウ

タハン△ムシリ△カタ
この世はかならす

ムシリ△ホツパコ
後の代はまた

シネツブ△エプイケ
ひとつ蓮の

ヲホンノ△ヌペツネ
なかく楽しみ

同にしる壽　　小師　　佛彦
フチゲン

タネヲロハノ△エチヲビツタノ△ケシトく
今よりはみな人ことにひゞくに

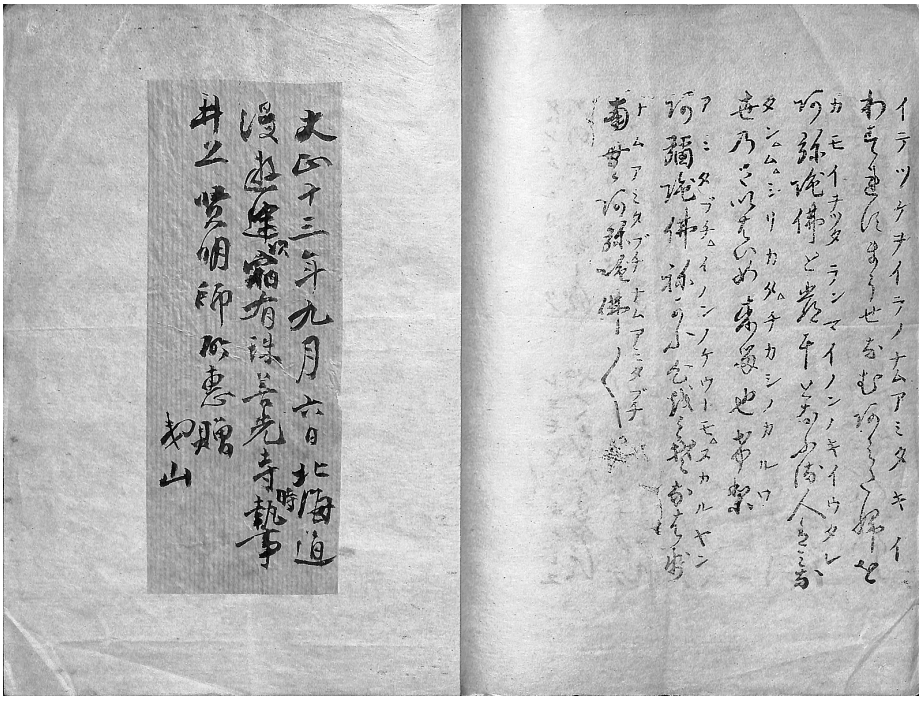
ショモヤ□△ホムシユ
やくなんうけず

アヲラム△セトクテ
浄土にうまれ

カシケタ△アンナ
臺にすみて

ショモライ△ルエネ
しぬ事そなし

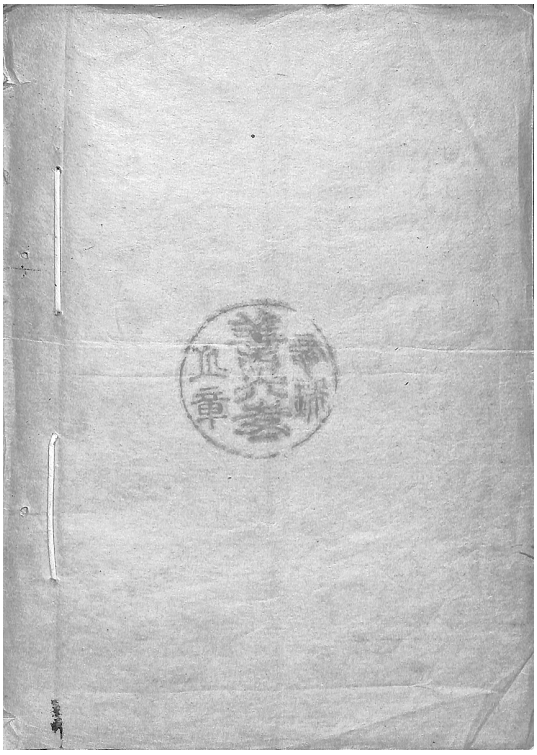
03オ



わすれすまうせなむ阿みたふを（イテツケヲイラノ　ナムアミタキイ）
阿弥陀佛と常にとなふる人はみな（カモイヲツタランマイノンノキイウタレ）
苔のさいはいめ来る也けり（タン△ム△シリカタ△チカシノカルワ）
阿彌陀佛ねかふ心をみそなはせ（アミタブチ△イノンノケウーモ△ヌカルヤン）
南無阿弥陀仏〳〵（ナムアミタブチ　ナムアミタブチ）

大正十三年九月六日北海道
漫遊途次霜有珠善光寺時執事
井上賢明師恵贈
夷山

裏見返　03ウ



有珠善光寺印章

裏表紙

（せきぐち　しずお　生活機構学専攻　教授）
（みやもと　はなえ　北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専攻　2年）

受理年月日　平成28年9月30日
審査終了日　平成28年11月30日